

遠隔授業の可能性

～ 2020 年度の遠隔授業実施の経験を踏まえて～

津 田 秀 和

目 次

1. はじめに
2. 考察対象とする授業
3. オンデマンド授業
4. オンライン授業
5. 対面授業との比較
6. 結びにかえて

キーワード

遠隔授業, 対面授業, オンデマンド授業, オンライン授業, 受講環境, 受講スタイル, 操作技術, 支援と実施の体制

1. はじめに

本稿は、2020 年度に covid-19 の流行に伴って導入された授業形式である遠隔授業（オンデマンド授業とオンライン授業）について、筆者の経験を整理し、今後の教育のための知見を検討するものである。遠隔授業は、2020 年度に各種学校機関で導入されるまでは、通信教育やストリーミング配信のように、安価で学ぶ場所を選ばないことをメリットとして実施されてきたように感じられる。例えば、資格の専門学校などでの遠隔授業はよくみられたが、スクーリングを伴う対面型の授業と比して安価に受けられるものが多かった。また、近くにそういった学校がない者にとって学びの機会を提供する目的で展開されてきたようである。しかし、このタイプの遠隔授業における教育効果はそれほど高く見積もられていなかったようで、資格試験の合格率などについては、遠隔授業と対面授業とで大きな差があったと言われている。過去に筆者が専門学校の講師や職員の方に聞いた時には、遠隔授業は受講生の学ぶ姿勢とやる気により、その効果が大きく異なることを教えてく

れた。対面授業の場合には、自習室などで他の受講生の必死の様子を感じつつ、学ぶことが出来る。また、講師と直接の対話を通じて、納得いくまで指導を受けることができる。これに対して遠隔授業の場合には、受講生の高い目的意識をなんらかの形で保てなければ、継続的な学習ができなかった。また、疑問点などについても、講師に質問する機会が多くなく、未消化のまま受講期間を終えることも少なくなかったようである。2020 年度から各種の学校教育機関で実施されるようになった遠隔授業にもこういった課題や弱点が存在した可能性がある。本稿では、筆者が 2020 年度に実施した遠隔授業を振り返り、どういった課題があったかを整理する。そして、遠隔授業を今後も活用できる可能性を検討し、そのための準備や対策に必要なものを析出した。

2. 考察対象とする授業

筆者が本務校である愛知学院大学経営学部および大学院経営学研究科において 2020 年度に実施した講義をその実施形式を含めて表 1 に示

表1 2020年度担当科目一覧

		春学期	秋学期
学部	講義1 (※)	企業倫理	コーポレート・ガバナンス
		環境ビジネス論	経営環境論
	講義2 (※)	エリアリサーチC※開講せず	エリアリサーチC※開講せず
		企業経営特論B※開講せず	企業経営特論B※開講せず
	演習	専門演習Ⅳ	専門演習Ⅴ
基礎演習			
大学院	講義	経営原理研究(Ⅱ)講義	経営原理研究(Ⅱ)講義
	文献	経営原理研究(Ⅱ)文献	
	演習系	経営原理研究(Ⅱ)演習	経営原理研究(Ⅱ)演習

※講義1は、通常の講義科目を指し、講義2はアクティブラーニング系の講義科目を指す
筆者作成

表2 2020年度受講生数一覧

春学期		秋学期	
環境ビジネス論	59名	コーポレート・ガバナンス	71名
企業倫理	100名	コーポレート・ガバナンス	26名
基礎演習	30名程度 ※	経営環境論	83名
専門演習Ⅳ	17名	専門演習Ⅴ	14名

※基礎演習は、担当教員3名がローテーションする形で3クラスを受け持つ演習である。
概ね各クラス30名程度が受講していた。

筆者作成

した。学部において、春学期、秋学期ともに2科目、アクティブラーニングを伴う講義を2科目、演習を春に2科目、秋に1科目担当した。このうち、アクティブラーニングを伴うエリアリサーチCと企業経営特論Bは、COVID-19の流行状況に鑑み、開講しなかった。そのため、今回の検討からは除外し、講義4科目、演習3科目を学部の授業として検討対象とする。大学院においては、通年の講義、通年の演習のほか、文献を春学期に担当している。大学院の授業は受講生が少ないことから、主たる考察対象ではなく、学部の授業の検討にあたり、付随的に検討するものとする。

これらは、春学期は主としてオンデマンド授業、秋学期はオンライン授業として実施された。春学期の専門演習Ⅳのうち、後半の数回はオンライン授業として実施された。ここでいうオンデマンド授業とは、教員が作成した

PDFファイルなどの授業教材ファイルや動画資料などを受講生がダウンロードし、その内容を読み込み、あるいは視聴し、課題を実施するものを指す。オンライン授業とは、授業時間に、教員によりオンラインでの動画配信が行われる授業を指す。便宜上、オンデマンド授業とオンライン授業を合わせて遠隔授業と呼ぶこととする。

各授業の受講人数は、表2の通りである。秋学期には、過年度において受講人数が多く見積もられたコーポレート・ガバナンスを2コマ開講している。演習科目と秋学期のコーポレート・ガバナンスは小規模、環境ビジネス論、企業倫理、コーポレート・ガバナンスは中規模の授業であった。

3. オンディマンド授業

3-1 オンディマンド授業の実施

2020年度の春学期はオンディマンド授業として実施された。6月の段階で実施可能な授業については、オンライン授業も可能となった。オンライン授業はMicrosoft teams（以下、teamsと表記）を用いて実施されることが想定された。筆者は春学期の授業について、演習Ⅳと大学院の授業を除き、全てをオンディマンド授業として実施した。また、秋学期の授業において、欠席者への対応を想定し、オンディマンド形式でも自習できるよう教材を準備した。ここでは、春学期のオンディマンド授業とその教材、秋学期の自習教材を用いた授業を考察の対象とする。

3-2 オンディマンド授業の形式

春学期のオンディマンド授業の実施において筆者が選択したのは、次の方式である。まず、教員が授業の時間までに該当回の授業内容に関するPDF資料を愛知学院大学のWebシステムであるWeb CampusⅢ (<https://wcs.agu.ac.jp/campusp/top.do>) にアップする。受講生はこれをダウンロードし、授業時間に読み込み、設定された課題を作成し、期日までにメールで教員に提出する。期日は概ね講義週の週

末に設定された。授業への参加は、受講生がWeb CampusⅢにおいて授業時間内に出席の表明をすることで確認される。大学院に関しても同様の形式をとったが、演習と文献についてはメールでの個別指導も併用した。学部の演習科目においては、4年次生向けの演習である専門演習Ⅳについては、卒業研究の進捗状況とそれに応じた個別指導の資料を個別で配布した。基礎演習については、通常の講義科目と同じ形式で実施された。秋学期の欠席者のフォロー用のオンディマンド対応について、オンライン授業のプラットフォームがteamsへと変更されたことに伴い、資料と課題の授受の形式が変わった。資料は授業の資料フォルダに掲出され、課題はformsを用いて回収された。teamsの方がWeb CampusⅢよりも、受講生から見て資料を見つけやすいことから、複数回に渡る欠席時にも対応しやすい状況となった。また、課題の提出状況も確認しやすいこと、教員が締めきり後も課題を受け取る設定にすることにより、遅延のアラートはでるものの、欠席者が後日課題提出をする場合にも対応できるようになった。

Web CampusⅢでの資料配付にはいくつかの問題があった。Web CampusⅢでは、事前に資料を掲出する際に、受講生が案内を受け取り、掲示内容の閲覧と資料ダウンロードが可能になる日時を設定することができた。まとめて資料を掲出したとしても、この設定をしっかりと

表3 担当授業と実施形式

実施	形式	担当科目	4月・5月の授業 実施形式	6月・7月の授業 実施形式
学部	講義	企業倫理	オンディマンド	
		環境ビジネス論	オンディマンド	
	講義(アクティブ ラーニング)	エリアリサーチC	開講せず	
		企業経営特論B	開講せず	
	演習	専門演習Ⅳ	オンディマンド	→オンライン
基礎演習		オンディマンド		
(参考) 大学院	講義	経営原理研究 (Ⅱ)講義	オンディマンド	→オンライン
	文献	経営原理研究 (Ⅱ)文献	オンディマンド	→オンライン
	演習系	経営原理研究 (Ⅱ)演習	オンディマンド	→オンライン

しておけば、定期的には、新しい資料をみられない。このことは、定期的な学習を促すことにつながる。しかし、この案内が送付されるタイミングが、システム上、必ずしも教員の設定したものとは一致していなかった。受講生の一部からは、夜中に資料掲出の案内が来て困るといった声も聞かれた。この不具合について、案内がメールで配信されるタイミングは指定した時間から早まることはなく、遅れるものであり、遅れは3時間程度が上限であると考えられたことから、逆算して深夜に案内がいかないように工夫する必要があった。

こういったシステム上の不具合についてはシステムの改善や教員の工夫により改善できる可能性があるものの、オンデマンド授業には、以下で示すようなそれ固有の個別指示や質疑に限界が存在するという問題が存在する。演習科目や大学院の科目のような比較的人数が少ない科目では、この限界を個別対応で埋めることが可能であった。対面時の授業と異なる対応と工夫を要するのは中規模から大規模の講義科目であった。そこで以下では講義科目のオンデマンド授業に関する検討を更に進める。

3-3 オンデマンド授業の教材

筆者が選択したPDFの資料を用いるオンデマンド授業においては、この資料の作り方が授業の成否を分けると考えられた。春学期の授業はCOVID-19感染拡大の状況に鑑み、その開始を4月20日まで遅らせることとなったが、その間にこの資料の作り込みを行った。土台となる資料は、過年度において授業で用いたMicrosoft PowerPoint資料であったが、口頭での説明ができないこと、また、課題実施時に追加的な指示やアドバイスができないことから、説明を増加する形で大幅に変更された。また、対面時に可能な回答時の相談や質疑応答ができないことから、受講生が自らの回答について、合っているかどうか判断しがたい状況が想定された。各回において課題についてのフィードバックを返す必要があると考えられた。こういった事情に鑑み、例年とは異なり、資料は①前回の課題へのフィードバックとコメント、②

授業内容、③課題の3点を含む形で作成された。なお、このフィードバック部分については、毎週作成する必要がある、事前に準備することが出来ないもので、教員負担を増加させるものとなっていた。

資料の作り込みにおいて、危惧されたのは文字情報の大幅な増加に伴う受講生の負担の増加である。例年通りの内容を文字情報だけで伝えるためには、量を大幅に増加させなくてはならないが、受講生がその読み込みにどの程度時間がかかるかが想定できなかった。この点を、各回の課題状況に応じて、微調整を行いつつ柔軟に実施することで克服しようと試みた。シラバスから逸脱はしないものの、重要度が高くないと考えられるいくつかの要素については省く形で資料を作成した。教材作成については、過年度の授業資料を土台に、事前に作成はするものの、フィードバックの作成、課題からうかがえる理解状況に応じた資料の量や質の微調整を行う必要があったことから、講義回ごとに作成し直したことになる。授業アンケートにおいて資料の分量が多い、課題で書かなければならないことが多いと、負担の大きさを指摘する声も少なくはなかったことから、資料作成の負担は大きかったものの、この資料と課題の量の微調整は欠かせないものであり、必要な作業であったと感じられる。

オンデマンド授業の課題についてもある程度の工夫を要した。講義開始当初は、一定程度の資料を読み込むと、そこに関連する課題があり、それに答える形をとり、この方式は過年度と同様であったことから、特別に配慮すべきと考えられなかったが、数回の授業を実施後、回答に大きなばらつきがあることに気づかされた。同時期には、どれくらいの量をかけばよいのか、こういった書き方が想定されているのか、といった内容と言うよりも答え方に関する受講生からの問い合わせも存在した。そこで、回答例を示す方式に変更した。例えば、企業倫理の第10回の講義で設定した課題3は次のようなものであった。「[「社会化」という観点で、自分自身が社会的な事柄を学習して、善悪の判断基準が変わったと思える事柄を例としていくつか挙げてください]」。対面授業で実施されていた

時には、この設問のみを示していたが、ここに「例」アルバイトで接客をしてみて、はじめてお客さん（サービス受益者）と自分（サービス提供者）の間でのマナー、礼儀、言葉遣いを意識した。」といった回答例を追加したのである。この回答のひな形とでも言うべきものを示すことで、回答の質が向上して感じられた。ただし、懸念かもしれないが、後述するように弊害もいくらか感じられたのも事実である。課題の提示については、さらなる工夫を施した。課題の意図を明示したのである。先ほど例として示した課題については「課題3は、コールバーグの考え方を理解する際に重要なポイントである、社会化を具体的に理解するための設問です。私たちは社会で様々な経験をして成長していきます。その中でもこれまで関わらなかった立場に立つ経験は自分たちの視野を広げ、善悪基準の幅を広げます（実際にそれに従って行動するかは別ですが）。その例をあげ、どのような点に気づくようになったかを記す設問です。」との追加説明を行っている。この意図は課題に答えながら、資料の説明を通じて何に焦点を当てた理解をすべきかを示すことにある。これが功を奏したかどうかは先の回答の質の向上ほど明確には分からないものの、全体的な理解度の向上にはつながり得たと考えられる。

質疑については、上手く実施できたとは言いがたいと感じられる。メールでの質疑応答を可能とし、その機会を作ったものの、質問をしてくれる受講生の数は限定されており、対面時であれば可能であった質疑への参加ができなかった受講生も少なくないと考えられる。また、課題提出直前での質問もあり、回答しきれない場合もあった。授業時間に資料を読み込み、課題に挑むことを想定し、当該講義日を中心に質問が出てくると考えていたが、その想定以外の時間配分での受講もあったこととなる。

企業倫理の授業においては、自分の価値や倫理的意思決定の仕方を他の受講生と比較し、相対化する試みを含めている。受講生間のダイナミズムを志向する授業設計となっている。コロナ禍以前には、受講生間での話し合いを可能とし、また、回答の傾向を適時、板書することでこのダイナミズムの実現を図ってきた。し

かし、オンディマンド授業の場合には、このダイナミズムの要素を創出するのが難しい。そこで、関連する講義の回においては、上述の課題へのフィードバックとは別に、回答の傾向や特徴についてのフィードバックも実施した。例えば、ある課題へのフィードバックとして「ほとんどの者（全員ではないが）が、見解が変わっていたと思うとしていた。変わらないとした者は、思考の癖として、多面的に考える癖がある、どんな影響が広がるかを考える癖があると自己分析していることが多い。・・・(中略)・・・リスクについての感受性が高いように思えた。どういった変化があるかという点で、共通していたのは、「ぱっと見で受け取る状況で判断するのでなく、影響の拡がりを考える」形でケースを考えていた（と思う）という点である。これがステークホルダー分析（を通じたモラルイマジネーションの訓練）の目的であることからこの点の指摘は大変好ましい。具体的な変化としては、影響の拡がり具体的に確認した上で、選択（見解表明）をしていたはず、という点に集約できる。「被害・加害関係でしかみていなかった」「悪い要素を見つけて安心していた」「関係者も働きかけが出来ることを見逃していた」「分かっているのに自分の価値観を絶対視して、冷静さに欠く判断をしてきた」などの言葉がこの視野の拡大を示すと考えられる具体的な回答の例である。(以下略)」と回答の傾向についてのコメントを資料に掲載した。これは、倫理的な意思決定が必要となる場面を想定し、熟慮なく、普段通りに考える場合の決定と、特定の手法を通じて考えた場合の決定とを述べてもらい、その比較をしてもらった課題へのコメントである。2つの回答を比較した場合に、同じ傾向の回答であった者もいればそうでない者もいた。この極端な2つの立場だけでも、受講生間でばらつきがあったこととなる。その情報を受講生間で共有することで、自分の意思決定の傾向に気づいてもらい、さらに、他の受講生の気づきを自らに取り込もうとすることで個々の価値軸がより豊かなものになっていくというシナリオを想定した授業であるため、この要素をオンディマンド授業へも取り込むよう試みたこととなる。この点は期末のレポートにおいて、

一定数の受講生が「他者との違い」「視点の広がり」といったキーワードで受講成果について触れてくれた点であり、一定の効果が得られたと感じている。また、自分の見解が例としてコメントに書かれたことについて好ましく、課題に挑む励みとなるとする見解も受講生から寄せられた。これらのことから、この教材作成上の試みは一定程度の成果が見られたといえそうである。

3-4 オンディマンド授業における成績評価

オンディマンド授業においては、対面での試験も実施できない状況であったことから、その評価について検討し直す必要があった。表4に示す通り、授業ごとに評価の項目と割合は異なる。試験を実施する予定であった企業倫理と環境ビジネス論については、試験を代替する手段を検討する必要があった。筆者は試験に代替するものとして、期末レポート課題を選択し、表5に示すような成績評価の項目と割合となった。

平常点については、表5の下にも示すとおり、各講義回の課題と期末レポート課題が含まれる。評価項目をシラバスに沿って示すと表5の通りであるが、実態としては、表4と成績評価の仕方としては大きな差が無いこととなる。

失格判定に用いられる出席状況の把握につ

いては、対面時の授業とは異なる配慮が必要となった。該当回の授業時間に受講生はWeb Campus IIIを用いて、出席したことを示すよう指示されるものの、通信障害の可能性やcovid-19感染または感染と疑わしき状況等を視野に収めると、平常時のように出席の表明がなければ欠席とするだけでは、受講生の不利益となる可能性があったためである。そこで、個別での申し出があった場合には、課題提出の状況や、通院状況等の確認を伴う形で個別対応を行った。各々25%を占める課題提出、中間課題提出についても同様に、通信障害の可能性等を視野に個別対応を行うこととした。実際に起こった問題としては、授業時間によるもののアクセスが過多となったためか、Web Campus IIIへアクセスがうまくできない状況が出て受講生が思うタイミングで出席表明ができない、課題ファイルを添付し忘れる、本人情報の記載がない状況で課題が提出される、などの状況が生じた。可能な範囲でという前提が見つが、できる限り個別で対応し、受講生の不利益とならぬよう対策を試みた。しかし、通信環境、受講に用いるデジタルデバイスの状況、パソコンの操作技術の習熟度等によっては、上記の問題が複数回生じてしまい、対策が間に合わないケースもあった。

期末レポート課題に関わるレポートの書き方指導については、負荷が大きいとする受講生の

表4 シラバスに示された成績評価の項目と割合

(単位 %)

	平常点	中間課題	試験	備考
企業倫理	25	25	50	出席状況は失格判定に用いる
環境ビジネス論	25	25	50	出席状況は失格判定に用いる
専門演習Ⅳ	100	0	0	出席状況は失格判定に用いる
基礎演習	100	0	0	

筆者作成

表5 変更された成績評価の項目と割合

(単位 %)

	平常点	中間課題	備考
企業倫理	75※	25	出席状況は失格判定の基準とする
環境ビジネス論	75※	25	出席状況は失格判定の基準とする
専門演習Ⅳ	100	0	出席状況は失格判定の基準とする
基礎演習	100	0	出席状況は失格判定の基準とする

※平常点75%のうち、各講義回の課題は25%、期末レポート課題は50%となる。

筆者作成

声はあったものの、比較的スムーズに実施できたと考えられる。これは、企業倫理、環境ビジネス論が当初から期末レポート試験を実施する計画となっており、講義の後半にレポート作成に向けた情報整理と分析のためのワーク回を設けていたためである。ただし、受講生が感じる負荷という点では、改善の余地があったと考えられる。平常時の授業では、資料を印刷して授業に参加してもらい、その資料から必要な情報をワークシートに抜き出しつつ、分析を進めてきた。担当教員はそのワークを補助する形で、対面でのアドバイスや指示に専念でき、それまでの講義で、内容の理解度が高くない受講生であっても、そのワーク中に挽回することも可能であった。しかし、オンディマンド授業の場合には、このワークの実施状況を確認できない。また、ワークの進捗状況も受講生ごとに大きく異なっており、共通のコメントを返すにくいことから、フィードバックを返すことも十分には行いえなかった。そこで、平均的なワークの進捗状況の情報と、誤った方向での検討例について、全体に示すこと、および、上手く進んでいる例を受講生の課題から抽出して、示すことで全体的なワークの方向性と進捗度についてのサポートを行った。また、最終的な到達状況をイメージしやすいように、レポート用紙（ファイル）を作成し、授業資料とともに配布するようにした。平常時のレポート試験においては、論題のみ示し、授業時の項目（ワークシートの項目）を含むよう指示する形で比較的、自由な書き方を促してきたが、直接的な指導やアドバイスが困難な状況であったことから、ある程度まで方向付けをするガイドが必要と感じ、用紙をひな形として掲出したのである。具体的には、ワークシートで整理し、考察した内容を10項目程度に整理し、見出しと解説を付けて、ワークシートを見ながらレポート作成をできるようにした。また、項目間の一貫性を保つべく、全体的な考察に関わる項目を付け、記述させるようにした。レポートが書きやすかったとする受講生の声も寄せられた一方で、項目を明示したことにより、負担の大きさを強く感じた受講生も存在した。

オンディマンドで実施された2020年度春学

期の成績評価をみると、各講義回の課題、中間課題、期末レポート課題の全てにおいて、例年よりも評価が高かった。ここまで述べてきたように、各々の課題においてひな形を示す等の担当教員の工夫を前提に、それに倣う形で受講生が努力をしてくれた結果であると考えられる。ただし、いくつかの課題もあると感じられた。第一に、平常時よりも期末レポート課題の提出率が数パーセント下がったことである。第二に、総合的な理解度が高まらなかった受講生が存在していたことである。提出率の低下については、科目によるものの5%前後低下していると感じられた。期末レポート課題を提出しなかった受講生の中には、高出席率を保ち、課題提出状況もよく、またその課題内容も悪くはない受講生も存在した。例年であれば、期末レポートを提出しない受講生は、出席率が低い、平常時の課題の状況も好ましい水準とはいえない場合に限定される。提出締め切りを間違えるケースもなくはないが極めて希であり、例年の対面式の講義では経験しない状況が存在したこととなる。総合的な理解度が高まらなかった受講生が存在した状況とは、各回の課題でみられる理解度と、期末レポートでの総合的な理解度との間で後者が低い状況を指す。各授業回の内容をつなげ授業全体を通じて理解したことを表現できる度合いと言ってもいい。講義で最も重要視したい総合的な理解度が高まらない受講生が例年よりも多く感じられた点については、改善の余地が大きいと感じられた。

こういった例年と異なる状況について、学部のFD関連会議での共有される情報や他の教員との交流から得られる情報から推測される原因がいくつか存在する。1つには、課題に追われ、課題を提出することのみに終始してしまった受講生の存在である。オンディマンド授業は、出席の表明を定時に行う必要があるものの、教材の読み込みや視聴と課題への取り込みについては、資料が掲出されてから締め切りまで任意のタイミングで行うことができる。教員が想定する受講する講義の時間帯を中心に定期的に学習時間を設けることが諸種の事情からできてない、あるいは、課題に時間がかかり、後回しとなる科目が出てくるなどの理由で、締め切り

間に合わせることに手一杯となる受講生が存在した可能性があることとなる。期末レポート課題は事前の講義数回で重要な項目ごとの情報整理と考察を済ませているため、提出されるレポートの文量と比して短時間で作成可能である。しかし、受講時に各回の繋がりを意識して受講していない場合には、期末レポート課題に含まれる総合的な考察が十分にできず、ここに時間を要することとなる。総合的な考察で全体をまとめていく中で、各項目、各要素の内容の不備に気づくこともあったかもしれない。このような状況に陥り、かつ、他の授業課題をこなす必要があった場合に、当該科目の期末レポート課題に対して十分な時間をかけられず、期末レポート課題の提出を断念したかもしれない。担当教員からみると、各回の課題の提出状況や内容から学習上の問題を察知できず、対応がとりきれなかった状況で生じた問題であり、非常に勿体ない提出漏れと感じられる。

2つ目に、オンライン環境、デジタルデバイスの操作技術が整っていない受講生が存在した可能性を指摘することが出来る。オンライン授業であれ、オンデマンド授業であれ、受講のための環境と、ワープロソフトやメールソフト等のアプリケーションを使いこなす技術が整っていることが前提となって、授業は進められる。ここでいう受講のための環境には、通信環境、画面が見やすく入力等の操作が容易な端末、メモをとりながら落ち着いて受講できる場所などが含まれる。オンデマンド授業の期間は場所については自宅が多かったと考えられるため、問題なかったと考えられる。通信環境と端末、操作技術については、受講生間でばらつきがあったと考えられる。これら3つの点について、推奨されたのは、ノートパソコンまたはデスクトップパソコンをLANへの有線接続へ直に繋いだ環境である。教材を印刷できるようにプリンタが使える環境にあるか、または、大画面やマルチモニターで授業資料の確認とワープロソフト等での作業を同時に行える環境が好ましい。スマートフォンはこれらの要件を満たさない。Wi-Fi接続または4G・5Gでの接続が前提となり、通信が安定しない場合もある。画面が小さいため、複数のアプリケーションを同

時に操作することが困難である。また、プリンタについても設定をしなければ使えず、対応プリンタがない場合には印刷することができない状況となってしまう。受講生からの相談から判明したことであるが、受講生の中には自宅にパソコンがあるものの家族との共有であることから、常に使用することができず、やむをえずスマートフォンをメインとする形で受講を試みた者もいたようである。このような環境の場合には、資料が読みにくく、資料を見ながら課題を行うことに支障が出ていたとしても不思議ではなく、期末レポート課題のように多めの文章作成を前提とする課題の場合に、間に合わなくなった可能性がある。また、教員からの期末レポート課題についての情報を十分に理解できなかった可能性もあったと考えられる。ここに、操作技術が十分でない状況が加わることで、別の問題も生じる。各回の課題でも生じたことであるが、メールに添付して課題、期末レポート課題を提出するときに、添付忘れ等が生じた受講生も存在した。期末レポート課題について締め切り前後に、高出席率でありつつも期末レポート課題未提出者に確認のメールを送付したが、そのうちのいくらかは、送信したつもりが出来ていなかったと返答していた。担当教員として、個々の受講生の受講環境全てを把握できるわけではなく、また、その各々の環境に対して、適切なアドバイスをする時間的な余裕も、技術面での知識もあったわけではなかったため、そういった受講生に対して全てをフォローしきれなかった印象が強い。もちろん、いわゆる「コロナ疲れ」「自粛疲れ」に起因する形で最後まで受講し続けられなかった受講生もいたと考えられるが、ここで指摘したような原因もあり、例年にはない形で、期末レポート課題の未提出者が例年より多くなっていったのではないかと推測される。

4. オンライン授業

次にオンライン授業についてみていく。オンライン授業は2020年度の6月からの専門演習Ⅳと大学院の経営原理研究(Ⅱ)講義、演習、

文献において、また同年度秋学期のコーポレート・ガバナンス(2コマ)、経営環境論において実施された。2020年度秋学期に対面で実施されたのは、専門演習Ⅴ、大学院の経営原理研究(Ⅱ)講義、演習であった。ここでは、この対面実施された授業を除く、2020年度春学期の専門演習Ⅳの6月以降の授業と秋学期のコーポレート・ガバナンス(2コマ)、経営環境論の合計4つの授業を主たる検討対象とする。

4-1 オンライン授業の形式

筆者はオンラインのプラットフォームとしてteamsを用いた。授業資料の配付、出席、課題提出、授業の実施の全てをteamsで行った。オンデマンド授業を主として行っていた2020年度春学期には、Web CampusⅢを主たるプラットフォームとしていたものの、課題の受け取りや質疑応答はメールを用いていた。授業時間外の質疑応答はメールを主としたものの、teamsでほとんど全てのやりとりを可能としたことは、受講生からみてシンプルでわかりやすい方式になったと言えそうである。

各回のオンライン授業の段取りは次のようになる。まず、オンデマンド授業と同様に、資料を事前にアップロードする。受講生はこれをダウンロードし、印刷した状況、または、授業時に閲覧可能な状況で、授業に参加する。授業はteamsの会議機能を用いてライブ配信される。ライブ配信中心に出欠に関するアナウンスがなされ、teamsを通じて出席確認がなされる。また、受講生は教員の指示するタイミングで、授業資料内の課題に取り組み、当該授業時間中または教員の指示する締め切りまでに課題をワードで作成し、teamsの課題の機能を通じて提出する。授業内容についての質疑は、授業時間中には、teamsのチャットとメール、授業時間外はメールで可能とした。

オンデマンド授業と異なり、受講生は授業時間にライブ配信される授業に参加する必要がある。オンデマンド授業の弊害として指摘されることがあった生活のリズムの乱れ、締めきりぎりぎりで課題をこなすという支障のある学習スタイルなどに対して、いくつかの改善が進

むことが期待できた。また、教員による解説とオンタイムでの質疑が可能な環境が出来たことによって、オンデマンド授業の弊害と考えられた文字情報みでの学習の困難さや質疑応答の困難さといった問題のいくらかがいくらか解消されることが期待されたと考えられる。

オンデマンド授業よりも高い教育/学習効果が期待され、実際にその効果があったと考えられるteamsを用いたオンライン授業であったが、その実施においていくらかの課題もあった。まず、筆者のteamsの操作習熟度を前提とした場合、資料のアップロードについては、Web CampusⅢのように日時設定ができなかった。あまり早い日時に授業資料をアップロードすると、資料を読んで課題に取り組むことを誘発し、オンデマンド授業との区別が曖昧になり、オンライン授業のメリットである解説による理解度向上が期待できなくなる。解説を聞かない状況で課題を作成する状況は、教育/学習効果の向上という点からこれを回避しなければならないが、印刷して授業に臨みたい受講生が存在することを考えると一定程度の余裕を持って資料は受講生に提供されなければならない。言い換えると、授業直前の資料掲出では印刷が間に合わなくなり、やはり教育/学習効果の面から問題が生じることとなる。資料のアップロードのタイミングについては、教員が科目性質に合わせて工夫する必要があった。次の課題として、teamsの操作ミス、不具合に由来するオンライン授業の課題も指摘できる。teamsはwindowsパソコン、Mac OSパソコン、Android端末、iOS端末、iPad OS端末等のマルチなOS対応となっている。各々で対応するteamsのバージョンが異なっていた時期もあった。そのためか、teamsの操作において、いくらかの問題が出たのも事実である。教員が想定するようにformsの機能や画面共有が稼働しないケースも存在した。例えば、Android端末やiOS端末、iPad OS端末の場合などに授業用のフォルダにアクセスできない、あるいはファイルが開けないという問題が生じていた。また、2020年秋学期開始当初には、PowerPointの共有を行うと、PowerPointの画面が教員のものはページが進んでいっても受講生から見る

と一ページ目から動かないという状況も生じていた。いくつかのトライアンドエラーを経て、そして、大学に寄せられるレポートから安定的な環境を模索する必要があった。

これらの問題以外にも、受講生の受講環境によっては、別種の問題も出ていた。例えば、スマートフォンで受講する学生がいた場合に、うっかりとタッチパネルを触ってしまい、画面が固定されてしまう、ミュートが解除されるといった問題が生じていた。前者においては、教員が見せたいと考えるPowerPointなどの画面が受講生の端末では見られず、教員の解説画面のみがみえるといった状況となり、受講に支障を来していたとの連絡もあった。後者については、受講生の受講環境によってはミュートの解除に気づかないケースもあったようで、雑音混じりでの授業進行となったり、教員側からミュートにする操作をしたりと、いずれの場合でも授業の進行に支障が出てしまうこともあった。授業の進行においては、受講生のマイクの状況についての注意喚起、教員の示すスライドや音声の状況などについて、不具合がある場合に受講生に教えてもらうようお願いするなど、対面授業時では行ってこなかった注意やお願いを伴う形で受講生に授業参加をお願いしたこととなる。

教員側の授業配信環境についても気を配る必要があった。筆者は、27インチのディスプレイを持つデスクトップパソコンを配信に用いた。音声機器は、UBS接続のマイクとヘッドフォンを用い、通信環境として有線でのLAN接続を用いた。手元にノートパソコンを準備し、チャットやメールの確認をしつつ、授業を進行した。マイクをヘッドフォンと一体型ものを使用し、より口元に近いところから音声を拾えるようにしたのだが、USB接続の不具合があったのか、音声が聞こえにくいとの見解が出てきた。そこで、デスクトップパソコン内蔵のマイクを用いることにした。こちらの方が受講生からは聞こえやすいとの評価であった。口元にマイクがある場合に、マイクに触れた時の雑音や、ドリンクを飲むときの音が入ることがあるが、これがなくなるもの利点と感じられ、新しいマイクを準備せず、パソコンに内蔵され

ているマイクを使用し続けた。また、ヘッドフォンについては、受講生の発声に早く気づく目的と、ハウリングを防ぐ目的とがあった。概ね、これらの目的は達成できたと考えられるが、想定外の問題も生じた。受講生が意図せず、マイクをオンにしてしまい、音声がteamsの会議に入ってくる際、その音量が非常に大きなものであると、その対応のため、また、純粋に驚きのため、教員が戸惑い、一時的に授業をストップせざるを得ない状況になったこともあった。教員側でできる対応として、ヘッドフォンのボリュームを比較的小さくしておき、受講生の発声があったときに音量を上げる等があったが、そういったボリュームの管理にも気を配る必要が出てきた。これらのような形で、授業開始当初の段階にできるだけ整った環境を準備していたつもりでいたとしても、授業を実施して気づかされることも多く、微調整をしつつ、進行する必要があった。

4-2 オンライン授業の教材

オンライン授業の教材は、オンデマンド授業での教材に準ずる形で作成された。筆者が行っていたオンデマンド授業よりも、音声と映像での解説がある分、より充実した学習につながる事が想定された。しかし、音声と映像が途切れてしまう可能性が想定されたため、ある程度までは教材を読むことで分かるようにしておく必要があると考えた。そこで前年度までの講義資料に言葉を付け足す形で資料を作成した。スライドの作成は夏休み期間の後半において主として行われた。筆者が2020年度春学期に作成したオンデマンド授業教材と異なるのは、簡潔に表現できるところは簡潔に表現したこと、および、読まない箇所を明確にしたことの2点である。前者は資料内の文量を過剰にしないことを目的として行った工夫である。オンデマンド授業教材でのように、全てを文字情報で説明する場合には、誤解を生まないように多くの言葉を正式な文章で示す必要がある。しかし、こういった資料は、解説を伴う授業の資料としては冗長的である。単に資料を読む授業となりかねず、受講する側からみても好ましく

ない。こういった懸念もあったため、簡潔な表記で済ませることを心がけた。一方で上述のように、音声や映像の途切れが生じ、その箇所の解説を文面で確認する必要がある時を想定し、解説文書もスライドに含めた。この箇所は、オンライン授業時に読み上げたり、解説したりすることはない。別ページに記載し、色も変え、読まない箇所であることが分かるように工夫した。これらの工夫により、授業進行時に解説をする資料をできるだけ簡潔にし、テンポ良く授業を進められるようにした。なお、授業時間に受講できない受講生のためにオンデマンドへの対応も想定する必要があったが、授業録画を行ったことと、解説スライドを含む形で資料を作成していたことから、同一資料の掲出と授業時の録画により、対応できたこととなる。

質疑はオンラインのチャット、メールでのものを可能としていたが、十分に活用されない可能性もありえたため、オンデマンド授業の時と同様に、前回の課題へのコメントとして、集合的なフィードバックを授業資料に含めるようにした。フィードバックについては、オンデマンド授業の時と同様に、受講生の学習意欲を高め、また、理解の向上につながっていたものと考えられる。

オンデマンド授業教材と大きく異なったのは、別紙として配布する資料の扱いである。受講生の受講環境が多様であることが想定されたことから、複数の資料を切り替えつつ、授業実施をした場合に、十分に対応できない可能性があると考えた。そこで別紙資料の要約をスライドに含め、資料を切り替えずとも受講できるように工夫した。特にこの工夫が必要と考えられたのはオンライン授業開始後の数回である。オンライン受講のための環境の整備を呼びかけつつ、別紙の要約を含めた資料で授業を進めた。また、オンライン授業開始当初は、思ったよりも授業が進まず、掲出資料の全てを説明しきれ

ないこともあったが、持ち越す内容も同一資料でみられるようにした。別紙として掲出したのは、全回共通の欠席時の対応についてのアナウンス文書、期末レポート用のレポートフォームであった。これらは授業資料として説明する回には抜粋する形でスライドに含めたが、受講生各自が確認し、適時使用する目的で掲出されたため、別紙のままとした。

4-3 オンライン授業の成績評価

オンライン授業へ移行するにあたり、講義科目の評価割合を表6のように変更した。中間課題を5点減らし、その分、平常点を5点増加させた。些細な変更ではあるが、中間課題の提出について、2020年度の春学期の提出状況と点数において、例年よりも低く感じられたためである。原因ははっきりしないが、遠隔授業での課題の告知の限界と考えられた。平常点や期末課題において、十分な理解を示す受講生の一部において、中間課題のみ評価が低いケースがみられた。春学期の時点では、評価割合通りに評価することしか出来なかったが、秋学期の授業開始時にこの評価変更のアナウンスをし、平常点の評価割合を増やすことで、個々の受講生の授業内容の理解度と評価との一致度が高まると考えられた。

平常点と中間課題、試験とで評価を行う点は、2020年度春学期のオンデマンド授業の時と同じである。試験については期末レポート課題として実施された。teamsをプラットフォームとして用いたことで、教員だけでなく、受講生も出席や課題状況が確認できたことから、より納得度の高い評価ができると考えられた。しかし、いくつかの点で、春学期と同様の成績評価上の課題と、春学期とは異なる課題もあった。

平常点は、各授業回で提示される課題で採点された。課題はteamsを介してformsで回収

表6 2020年度秋学期の講義科目における評価割合の変更

	平常点	中間課題	試験	備考
企業倫理	25→30	25→20	50	出席状況は失格判定に用いる
環境ビジネス論	25→30	25→20	50	出席状況は失格判定に用いる

された。formsで受講生が課題提出状況を確認できるようにすることも想定した。課題の締め切りは設定するものの、締め切りを過ぎた場合にも提出可能な状況とした。これは、公欠等に基づき、事後的な課題提出を要する場合にも、formsで課題回収を可能とするためである。ここで生じた問題は、課題の送付ができていない、課題の添付がなされていないといったものであった。teamsやformsの操作に不慣れな受講生の場合、どういった操作によって、自分が作成した課題が提出済みとなるのかが分からなかったのかもしれない。一部の受講生から、提出がうまくいっているかどうかを確認して欲しいと連絡が入ることもあった。こういった対応を行った受講生においては、問題はでにくかったと考えられる。また、そういった慎重な対応をする受講生においては、時折、formsで課題提出状況を確認し、ミスがあった場合に、相談してくれていたことから、より問題が出にくい状況になっていたと考えられる。推測ではあるが、teamsの操作になれておらず、課題状況を確認していなかった受講生において、課題提出を巡る問題が出ていたと考えられる。課題の送付が出来ていない場合には、受講生のforms画面において提出済みとなっていないため、事後的にも気づくことは可能である。また、ワードファイルの添付ができていない場合にも、そのことは自らの課題を確認することで気づくことが出来る。そういった確認がうまく出来ず、提出したつもりが提出できていない課題が存在し、そのため、評価が低くなった受講生も存在したと考えられる。なお、これらの点について、受講生の中には、使用する端末ではワードで作成されたファイルが存在したものの、それらの提出が複数回にわたり、上手くいっておらず、かつ、その状況に気づいていなかったため、不合格となった者も存在した。この提出漏れについて、授業時に、不安のある受講生は相談して欲しいこと、および、teamsのアプリケーションを通じて状況を確認できることを説明することでトラブルの回避を試みた。また、評価割合の高い期末レポートにおいては、出席状況と課題状況を確認しつつではあるが、レポート未提出者に対して連絡をし、提出を促すこととした。

このように課題の回収については、受講生の多様な状況を想定して、アナウンスやフォローをする必要があったこととなる。ただし、成績評価時および評価後に、こういったアナウンスやフォローをすることはあってはならないと考えられたため、対応を行えたのは、授業期間のみであった。こういった課題の授受を巡るトラブルは、平常点の関わる講義時の課題だけでなく、中間課題、期末レポート課題においても起こりえた。そのため、不本意な状況で評価が下げられた受講生がいた可能性も否定できない。

中間課題は、期末レポート作成の為の調査課題であった。出席率の高い受講生においては問題なく提出されていた。一部、内容に不備がある受講生も存在したが、期末レポート準備回で不備に気づく者も多かった。授業時のフィードバックにおいてこの点の情報提供が出来たことが功を奏したであろう。また、質疑などで理解の調整が進んでいったことも中間課題の内容の不備に気づけた要因となっていたと考えられる。期末レポートの準備回にはそれ以前の授業回と比べて、質問や確認の連絡が多く入った。また、複数回のやりとりを行うことも珍しくなかった。こういった対応が、中間課題の内容理解を含む、授業内容の理解を深めたといつてよさそうである。そういった受講生には、中間課題の作成が上手くいっていないことに気づき、再作成をしたいと申し出るものもあった。そこで、期末課題に資料として付けることを可能とした。こういった対応から、期末レポート課題の評価は往々にして高く、総合的な成績評価としては一定以上のものとなっていた者が多くなったと考えられる。

期末レポート課題(試験)について、春学期に準じて、レポートフォームを掲出し、その項目を含める形でのレポート作成を促した。春学期と同様に、レポートの評価点は多くの受講生において例年よりも高い点数となっていた。このフォームは使用を義務とはしなかったが、講義時に整理と分析した内容を含めると、フォームの項目を含むこととなることから、使用することが強く推奨された。第12回から14回にかけて、中間課題で収集した資料の情報整理と分析を進めたので、しっかりと時間をかけて対応

できたものにおいては、レポートを作成しやすい状況となっていたと考えられる。しかし、ここでの対応が十分でなかった受講生においては、期末レポート課題の点数が著しく低い状況がみられた。結果的には、フォームを使用しなかった、あるいはそれに準ずる内容としなかったことに起因する低評価ではあるが、春学期と同様に、やや負荷の大きいレポート準備期間に受講生がどれくらいしっかり挑めたかが評価を分けたようにも考えられる。

失格判定に用いる出席状況については、授業時間内に forms を通じて確認された。筆者の場合には、特定の時間に授業進行を中止し、出席確認をすることを促した。結果的に、受講生には、授業時間内の出席確認と、締め切り日時までの課題提出が必要となっていた。2つの提出を義務づけることになることから負担も伴うが、ライブ配信される授業に参加し、適時、質疑に参加することでより理解を深めるオンライン授業として、成立させるためには必須と考えられた。この出席については、通信障害、forms が動かない等の問題も生じていた。通信障害は春学期と同様の受講環境に基づくところもあったと考えられるが、特定の時間帯などには、forms にアクセスしにくい状況もあったとする見解も聞かれたことから、サーバーを巡る問題もあったのかもしれない。forms の機能が想定通りに動かない状況もありえ、受講生の使用する端末の OS のバージョンや teams のバージョンによっては頻繁に生じていた。こういった状況が想定されたため、出席の確認については、forms 以外の方法も提示しつつ、チャットを通じた不具合連絡の確認をする、回避法が見つかり次第、投稿欄でその方法を示す等、授業進行そのものとは直接には関係のない注意を払う必要があった。出席の確認については、締め切りを授業時間終了時とし、教員が確認を促す時間でなくとも、確認できるようにすることでトラブル回避を試みた。また、春学期と同様に想定外のトラブルが生じる可能性があったことから、事後的な申し出についても、teams の会議の参加状況、課題の状況なども含めて、出席については柔軟な対応をとることも視野に収める形で出席管理を行った。

成績評価全般については、春学期と同様に、例年以上の評価点をとる受講生が多かった。期末レポート課題を提出した者における合格率も高いといえる。しかし、これも春学期と同様となるが、期末レポート課題提出に至らなかった受講生が例年よりも多かった。そして、高出席率で中間課題も十分にこなした受講生の中で、期末レポートを提出しなかった者も春学期と同様に例年より多く感じられた。春学期と異なるのは、いくらかこの期末レポート未提出者の割合が少なくなっていた点である。春学期のオンデマンド授業が主であった時には例年よりも約5%の未提出率が増加したと考えられたが、秋学期には3%程度にまで改善されていた。例年、レポート試験を提出せず、欠試となる受講生は一定割合存在する。講義期間の途中から授業に来なくなる者もいれば、授業にはほとんど参加するものの、欠試となる者もいる。後者においては、平常点においても低いことが多い。また秋学期には、4年生の一部において、卒業要件を満たす見込みが立ったためか、欠試となる受講生も少なくない。こういった例年の状況と、春学期の欠試状況とを踏まえて、秋学期の欠試者減少傾向について、その理由を探すと受講生において遠隔授業に慣れてきたことと、教員側においても学習効果が高まり、諸種のアナウンスと対応が可能となっていたことが考えられる。成績評価について、例年とは異なるネガティブな状況については春学期と比較して減ったものの、一定数存在した。上述のように授業時の課題、中間課題、期末レポート課題のいずれか、あるいは、複数において遠隔授業固有の問題が生じた学生においては、不本意な不合格となった者もいた可能性はある。概ね良い成績分布であったと考えられるが、改善の余地がある結果であったと受け止めている。

5. 対面授業との比較

演習科目や実習科目を除き、筆者の講義の多くは、対面授業時に、記憶することよりも、考えることに重点を置いてきた。この特徴は、とりわけ春学期に顕著に表れてきた。例えば、春

学期に開講される企業倫理の授業では、ケースライティングとそのインストラクションマニュアルを受講生が作ることを最終目標としてきた。ここでは授業で覚えたことを使うと言うよりも、授業に参加し、体感的に学んだ倫理的意思決定に伴う悩ましさや、倫理的意思決定の正当性の多様さをうまく表現することが求められた。授業においても、ケースへの見解を受講生に示してもらい、それを他者の示す見解との異同について、検討してもらおう。見解を示す時には、必ず道徳的理由付けの形で示すように促された。単に覚えるのではなく、自分なりに考え、見解を示す必要があるわけだが、受講生においてこれがすぐに可能となるわけではない。多くの場合に、まず、正解が何かを探る。次に参照可能なひな形を探す。しかし、この授業ではそういった正解やひな形をいったん否定し、自分の価値観を見つめ、見解を出すことを願う。こういった思考のプロセスは対話や教員の諸種の仕掛けを通じて促進されてきたこととなる。遠隔授業では、この対話の要素や仕掛けの要素が大きく減ったこととなる。対話は単なる質疑応答を意味するわけではない。自由に見解を出せるような雰囲気作りが必要になる。時には励まし、時には勇気や努力する姿勢を称える。ジェスチャーや表情などで、雰囲気を和らげたり、深刻さを感じてもらったりもする。遠隔授業での、メールやテキストチャット、ボイスチャットやビデオチャットでは、この授業に必要と考えられたコミュニケーションがとりきれず、考えることを促す授業を成立させることは大変難しかった。ここまででも述べてきたように、フィードバックを返す、丁寧に質問への回答を作る、質問を授業時に活かすといった工夫をすることでできるだけこの問題を減少させようとした。また、慣れてきてからに限定されるが、できるだけ表情豊かに授業を実施するようにした。しかし、対面授業時と比較すると不足していたと感じられ、この点は課題であると感じている。ただし、「じっくりと考える」時間がとれるようになった受講生とのメールやチャットでの対話では、より突っ込んだコミュニケーションが出来たようにも感じられ、ポジティブに評価したいと考えている。一人当たり

の指導に多くの時間がかかる点が課題ではあるものの、「じっくりと考える」受講生を前提とする場合には、遠隔授業の良さとして考えられる。時間面での自由度の高さを活かすことが可能かもしれない。遠隔授業のメリットを活かしつつ、遠隔授業におけるコミュニケーションの難しさという課題を克服する工夫が必要と考えられる。

包括的な理解を促すという点では、対面授業での柔軟な指導の方が現時点では優れているといえそうである。春学期のオンディマンド授業において、当初は何を書くか、どれくらい書かかといった質問が出てきた。また、いくらかの受講生からは、教員の想定から外れる回答が出されたり、回答が放棄される課題が存在したりと、期待通りの学習とそれに基づく回答が出てこないときもあった。受講生の課題状況を見つつ、回答例を増加させることで対応を試みたが、その結果として、回答状況は良くなったものの、各回の課題が個別バラバラの知識の確認しかできていない可能性がみてとれた。各回の課題はよく出来ているものの、それらをつなぎ合わせ、総合的な見解を出すことができない受講生も存在したこととなる。対面時には、対話でこういった各回の知識をつなげることが可能であったが、遠隔授業での対話のしにくさがこれを妨げた可能性は否めない。この点も克服されるべき遠隔授業の課題と考えられる。

また、対面時とは異なる形でいわゆるサボる学生が出現したことも遠隔授業の課題として指摘できる。オンディマンド授業で教員が可能な学習状況の把握方法は、出席確認と課題提出状況とその内容確認のみである。オンライン授業においても、出席確認と会議への参加状況、課題においてこの確認がなされるのみである。対面時であれば、居眠りをする、授業と関係のないことをするといったサボり行為を目視で確認できる。また、他の受講生の目もあることから、一定程度の緊張感があり、一定程度の規律が保たれつつ、受講がなされ、学習が進められることがサボりの抑止力となってきたとも考えられる。遠隔の場合には、個人で受講することが想定される。この受講がどのような状況での受講となっているかを確認することはできない。オ

ンディマンド授業においては、締めきりに間に合うように課題を作成する、オンライン授業であれば、とりあえず授業に形式的に参加しておく（会議に参加の状況をつくっておき）、出席確認のみ気をつけ、課題は締め切りまでに作成するといった者がいても不思議ではない。不適切な受講という点で、筆者が秋学期の授業で実際に体験したもののうちの1つは、受講生のマイクを通じた雑音に関するものであった。受講生が誤ってマイクをオンにしてしまい、受講生の端末を通じて様々な音が聞こえることがあったが、その雑音の中には、飲食店、遊技場といった受講生には到底ふさわしいとはいえない場所で受講していることを示すものもあった。またBGMのような形で流している音楽が入ってくることもあれば、公共交通機関内で移動時に受講していると思われる音が舞い込んでくることもあった。対面時には考えにくい状況である。不適切な受講という点で筆者が直面した別の経験として、授業後も授業（teamsの会議）に参加し続ける受講生が存在したというものもある。受講生の中には、授業終了後も当該授業の会議を退室しないものも存在した。単に退室をし忘れた者もいたようであったが、授業へ会議への参加はしているものの、実際には授業には参加していなかった者もいたようであった。秋学期にある授業に参加していたある受講生は、昼食を買いに行くため、teamsにつないだままでパソコンを離れ、その結果、その間に行われた指示を聞けず、また授業時間後も繋いだままになったことを教えてくれた。また、ある受講生は、寝不足でオンライン授業に参加はしたものの、参加後に眠ってしまい、授業をほとんど聞かない状況で、長時間、当該授業の会議に参加する状況となってくれたことを教えてくれた。上述のどういった場で受講しているかもみえないとともに、授業に参加している状況になっても、視聴をしているかどうかかわからない状況も当然ながらありえる。緊張感を持って授業に参加するという点で、いくらかの弱点を持っている。

遠隔授業そのものの問題というわけではないが、遠隔授業で不足しがちなコミュニケーションを穴埋めするためのチャットやメールでの受

講生からの連絡が、欠席連絡、課題の遅延連絡、欠席回数確認といった講義の理解促進以外のものに多く使われていたのも、改善されるべき課題と考えられる。対面授業時には、オフィスアワーの活用などに直接、教員と話す形で欠席したことの伝達と自習の仕方の確認等がなされていた。一定の負荷がかかる方式ではあるが、その負荷が増さないように受講や課題について自己管理することを促していたかもしれない。筆者の個人的な感覚ではあるが、安易な欠席連絡のツールとなっていた可能性もあったと感じられる。また、チャットやメールで欠席連絡等をする受講生の中には、学籍番号や氏名、曜日時限や授業名を書かない場合もみられた。授業直前の欠席連絡や、時として授業時間内に欠席の連絡が来ることもあり、これらの連絡のほとんどが、相談や指示を仰ぐのではなく、単なる一方的な伝達となっていたことも問題である。授業内容や課題に関する質問については、受講生も複数回のやりとりを前提としているためか、時間の余裕を持って、かつ、丁寧な文体で書かれたメールまたはチャットが送られてくる。この場合には、担当教員も返答をしやすい。しかし、安易な欠席連絡と思えるものについては、指示を含む返答を返すことも出来ないまま当該授業回が始まってしまう。事後的にしか指示ができない状況となり、時には、公欠を巡る誤解、就活と講義との関係を巡る誤解等に基づく、適切ではない欠席も存在し、結果、当該受講生が評価上、不利になることもあった。チャットやメールは直接に会わなくとも、質疑を可能とする優れたツールではある。労力や時間を省くという観点では使い方によっては便利である。しかし、十分な確認を伴わず、誤解も含まれる理解に基づき、寄せられるチャットやメールについては、受講生の成績評価の上での不利益や教員とのトラブルの原因を発生させかねないため、諸手を挙げて喜べるものとは、現時点ではいえない。メールやチャットでの連絡を前提とすることは、安易な欠席を促すことにもつながっていたのかもしれない。

学生の反応がみえないことも対面授業と遠隔授業の大きな違いであった。オンディマンドは資料掲出型であるため、そもそも受講生の様子

がみえない。オンライン授業は双方向のやりとりが可能ではあるものの、少人数のものを除き、いわゆる教員の「一人喋り」の状況となっていた。講義科目においては、音声も映像もオフの状況で受講してもらっているため、学生の反応がほぼない状況であった。この問題点はいくつもあるが、トラブルに気づけないこと、理解できたかどうかを表情等で確認できないこと等がある。トラブルについてはここまででも触れてきたマイクトラブルに起因すると考えられる音声とぎれる問題などが典型的である。学生の反応がみえない点は、言葉通り、楽しく受講できているのかそうではないのか、難しすぎるのかどうか等がみえないことを指す。また、臨機応変な対応が生まれてこないことも、学生の反応がみえないことに起因する課題といっていると思われる。例えば、中間課題のアナウンスについて、対面授業であれば受講生との対話の中から、当該回以外でも欠席者向けに追加的にアナウンスすることは可能であった。しかし、遠隔授業では事前に資料掲出をしている前提があったことも含め、課題を提示する回と、課題回収の直前回を除く回ではアナウンスすることはなかった。こういった学生とのやりとりの中で気づくことは対面授業の1つの利点と考えられ、一人喋りをメインとするオンライン授業では実現しにくい、あるいは出来るチャンスが少ないものである。

ここまで課題を中心にみてきたが、対面授業と比して遠隔授業が持つメリットと考えられる要素について検討していく。

遠隔授業を行うようになり、受講生との授業内容や課題内容を巡る対話の内容に変化が生じていたように感じられる。筆者は対面授業時にも、受講生の対話をできる限り行ってきた。例えば、授業内の課題に挑んでもらう時間などに、課題内容について時として受講生から質問を受ける形で、時として教員から話しかける形でこの対話は進められた。授業中の対話が活性化する度合いについて、表7を用いて検討する。表7では、受講生がどのタイミングで質問する内容を思いつくか、どのタイミングでどのように質問することを確定するかの2つの軸で4つの象限を作成し、各象限の質問が出るタイミングを示している。第一象限(A)では、課題を見た時に質問内容を思いつき、そのまま教員に質問することを想定している。第二象限(B)では、課題についてじっくりと考えていく過程で質問したい内容が確定し、それをそのまま質問することとなる。第三象限(C)では、課題について考えて行く過程で質問が確定するが、どのように質問するか吟味がこの後に必要な過程となる。そして、第四象限(D)では、課題を見た時に質問内容は思いつくが、これをどのように聞くかをじっくり考えることとなる。(A)の象限は質問が出るまでの時間が最も短い。これに対して(C)の象限は最も時間がかかり、(B)と(D)の象限でかかる時間は、(A)と(C)の間と想定できる。

対面授業の時には、(A)の象限の対話が最も活性化しやすい。(B)と(D)の象限の対話は授業時間の後半に入って出やすい。(C)の

表7 受講生の質問までの過程と時間

		受講生の中で質問内容が確定するタイミング	
		課題内容をじっくりと考えていく過程	課題をみた時
質問する内容の検討時間	検討時間は短い(思いついた質問をそのまま聞く)	(B)対面授業の後半において出てくる質問である。オンライン授業の後半から締め切りまでの間に出される質問である。	(A)対面授業の質疑において活発に出される。オンライン授業時にもある程度見られる。
	検討時間は長い(質問する内容を吟味した上で聞く)	(C)対面授業では、授業の後半または、授業後に寄せられる質問である。オンライン授業時には、授業後から締め切りの時間までに出てくる質問である。	(D)対面授業では、教員から声をかけて対話をする中で出てくることが多い。オンライン授業時には、授業後に出ることが多いが、早い時間に出される。

象限の対話は授業時間のかなり遅い時間にならないと出てこないこともあり、時として授業時間後やオフィスアワーなどにこの象限に関する質問がでてくることもある。ここで検討している対話は課題に関わるものであり、授業時間後やオフィスアワーでの質疑は課題提出後となることから、受講生からみて積極的になされるとは考えにくく、対面授業時に数は少なかった印象である。

オンライン授業時の対話も、対面授業時の対話と傾向は似ているが、(A)の象限の質問が減り、(C)の象限での質問が多くなっていたと考えられる。特に注目したいのは(C)の象限の質問の増加傾向である。対面授業の場合には、概ね授業時間内に課題に取り組んでもらい、その時間中に課題を回収していた。対面授業の時には、解説を行った後、すぐにそれに関連する課題に取り組んでもらっていた。これを複数回繰り返し、その授業回の課題としていた。オンライン授業の場合には、解説をすべて終えた後に、課題に取り組んでもらった。課題は内容のまとめごと提示されるが、取り組むのは一通りの解説が終わる授業の後半に入ってからという段取りであった。課題作成をMicrosoft Wordで作成してもらうことから、入力時間がかかることを想定し、締め切りを授業時間内ではなく、授業時間後一定時間後としていた。じっくりと課題内容を検討し、どのように教員に質問するかを考えてから質問することを想定する(C)の象限の場合には、質問までの時間が長くなる。受講生によっては、対面授業時には、残り時間がわずかな中で質問することを躊躇った者もいたのかもしれない。しかし、オンライン授業では、締め切りまでの時間的猶予があり、かつ、躊躇いが比較的少なくなると考えられるチャットやメールを活用できることから、この象限の質問もしやすかったと考えられる。(C)の象限での質問は、時間がかかるものの質の高い質問である可能性が高い。しかし、これまでの対面では出にくかった可能性がある。このように考えると、これまで出にくかった質問が出るようになり、そこへの対応が可能となったことは教育／学習上好ましいと考えられる。

授業に関連して受講生から出てくる質問の質

の変化の考察を通じて、受講生がじっくりと自分の頭で考える傾向が出ている可能性の指摘と、そのフォローにより学習効果を高める可能性がみえてきた。遠隔授業は、自分の好む環境で、自分のペースでの学習を可能とする。もちろん適切な受講環境の要件はあるが、マスクをした状況で対面授業を受けるよりもより学習しやすい環境で受講できた者もいたと考えられる。また、講義回によって比較的時間がかからず理解できることもあれば、時間をじっくりかけなければならぬこともありうる中で、90分という枠に縛られず、学習できることは、受講生によっては大きなメリットと感じられたかもしれない。こういったメリットを享受するためには、受講生が、受講の仕方についてまずは自分で考え、判断すること、教職員や知人などに不明な点を確認していくこと、そして、それらを繰り返すことで、受講の仕方を洗練し、確立していくことが必要と考えられる。遠隔授業には、どうしても緊張感が欠如するという問題がついてまわる。これを克服して、効果的な学習につなげる学習スタイルを作らなければ、単に課題をこなすのみに終始しかねない。ここで示したじっくりと考えることにたどり着けない。遠隔授業を教育で活かすためには、こういった学習スタイル形成への理解と、フォローを要するのかもしれない。

6. 結びにかえて

本稿では、筆者の2020年度春学期・秋学期の遠隔授業の経験を、形式、教材、評価の観点から整理し、対面授業と比較する形で考察してきた。遠隔授業には、オンデマンド授業とオンライン授業があるが、後者の方が、映像と音声による解説を伴うこと、質疑をオンタイムで出来ること等の観点から、教育／学習の効果は高そうである。しかし、後者の方が教育を施す教員においても、受講生においても授業の環境整備、技術習得、授業の進め方／授業の受け方を巡る理解という点で、より高い水準のものを要求していると考えられ、その運用の難度は高まる。筆者もいくらかのトラブルや失敗を経験

し、体制整備に努めつつ、試行錯誤しながら授業を実施し、大きな問題は生じてこなかったといえそうなものの、克服すべき課題は多くあるとも感じている。

本稿を結ぶにあたり、ここまでの考察を踏まえ、今後の経営学部での教育に向けて指摘できることを模索してみたい。SD 講習会など、多くの場面で指摘されつつあるが、*covid-19*の流行に伴い、導入された遠隔授業ではあるが、感染流行後の授業においても、そのメリットを活かすべきと考える。遠隔授業のメリットとしては、登校のための時間を要さないこと、自分のペースでの学習を可能とすることが、まず思いつく。コミュニケーションがとりにくいという問題はあるものの、比較的定式化された授業内容である場合には、こういったメリットが強調されてもいいと思われる。もちろん、単に定式化された知識の伝達だけでは大学の授業としては片手落ちと考えられ、これをディスカッション、レポート作成など、応用する形で昇華させなければならない。これらの指導においては対面授業、またはこれに準ずる個別指導が好ましい。個別指導の負荷の大きさを考えると、オンラインと対面の組み合わせ授業が妥当と考えられる。また、遠隔授業を活用するメリットとして、ここまでの考察から、じっくりと考える時間を作ることが可能で、じっくりと考えた上で教員との質疑を行える点も指摘したい。一年間にわたる遠隔授業の経験から、筆者のように思考力を深める、あるいは、自分で考えることを強調する授業の場合には、即時的な対応を要する質疑の時間も大事ではあるが、一定時間、熟慮の上で行われる質疑の時間も重要であることに気づかされた。対面授業においては、90分の授業という制約のもとで、個々の受講生の学習ペースが多様であることから、こういった熟慮時間は割きにくく、また、そのフォローも少なくなりがちである。対面での授業とオンラインでの授業が組み合わさることで、即時的な質疑と熟慮を重ねた上での質疑の両方が可能になれば、時間に迫られずに学習するスタイルを許容することが可能になるのではないだろうか。そうすることによって、各回の課題のように比較的、短い時間で、少ない知識で対応する

課題のみでなく、様々な要素をつなげ、総合的な考察をする力を養うことも可能になっていくように感じられる。

ただし、遠隔授業を今後もより良く活用していくためには、ここまででも考察してきたように、受講生の緊張感が低下しないように配慮される必要がある。また、受講生の受講スタイルの確立に対してそれを促進していく策を検討する必要があると考えられる。これまでの経験から、少なくとも受講環境の整備と受講の仕方について推奨される環境やスタイルについて、最低限度は整えるべきラインを強いメッセージとして示す必要があると考えられる。また、*teams*等の授業プラットフォームやパソコンとその通信環境のような技術に関する支援する体制の整備が必要と考えられる。受講スタイルについてのベストプラクティスを学生から募るというのもあっていいかもしれない。一年間の経験を経て、教員の側で授業の進め方や教材の作成についてのノウハウは蓄積されつつある。よりよい教育/学習を念頭におくならば、こういった教員の努力だけでは片手落ちで、受講生においても一定の努力を必要とする。こういった働きかけを大学全体で行えるならば、遠隔授業を対面授業と組み合わせた新しいスタイルの授業が実施でき、より高い教育効果を期待できると考えられる。

最後に、本稿では触れられなかった点を2つ示したい。演習や実習といった双方向のコミュニケーションを前提とする科目における遠隔授業の可能性を考える時に、重要と考えられるのは、教員と受講生の信頼関係である。密な指導をしようとするならば、オンライン授業スタイルであっても、1~3名ずつが限界に感じられる。その指導を受けない受講生は、その間に自身の作業を進め、また、他の受講生と適切なコミュニケーションをとり、議論を深める必要がある。筆者は2020年度において、演習の一部を数回、オンライン授業の形で実施したが、この受講生は4年次生であり、双方の信頼関係があったと考えられ、比較的、演習の授業運営は容易であったと感じている。この信頼関係が形成されていない中での実施について考えると、授業期間開始後数回を対面実施にするなどで、教員と受

講生、および受講生間のコミュニケーションを図り、信頼関係を醸成した後にでなければ遠隔授業は難しいと考えられる。もう一点は、ここで示した遠隔授業の可能性を検討する時に、前提となっている教員が多く時間と労力を割くという点を検討する必要があることである。2020年度は、「やらなくてはならない」という状況と使命感で教材作成、遠隔での授業技術の習得、学生との諸種のコミュニケーションを図ってきた。個人的な感触であるが、授業の準備と学生とのコミュニケーションに充てる時間が2倍以上になっていたとすら感じる。今後も遠隔授業の経験を積むことで、こういった時間は短縮できるかもしれないが、本稿で検討してきた遠隔授業の良さを活かすための工夫をし続ける場合、学生との対話等の時間を増加させざるをえない。大学のみならず、小学校、中学校、高校においても教員負担の増加が指摘されているが、平常の状況に戻った時に、この教員負担についてどのように捉え、その対策を練るかが、新しく導入された遠隔授業を今後も活かしていくかどうかの肝になると考えられる。そういった体制整備への期待をしつつ、本稿を締めくくりたい。